ごあいさつ

副総長　伊　藤　正　之

皆さんおはようございます。全学シンポジウム「大学の知と高校生の学力」に御参加いただきありがとうございます。主催の教育発達科学研究科の先生方および中等教育研究センターに感謝申し上げます。本来なら総長がごあいさつ申し上げるところですが、所用で上京中ですので、代って私からごあいさつ申し上げます。

従来、教育発達科学研究科が主催するいくつかの全学シンポジウムは、非常にタイムリーなテーマを選んでいただいてきました。的確なテーマの選択に対しまして、敬意を表するところでございます。

さて、私どもが大学で教育研究を行っていく中で、高校生の学力というものについて関心を寄せるということはきわめて限られていました。大学入学試験に際して、高校生に期待される学力というものを考えざるをえないということはありますけれども、これも限られた範囲内のことだと思います。本学は大変広範囲な研究者を擁する総合大学でございます。そこで、多くの研究者のみなさん方が中等教育に期待し、高校生の学力に期待するものを本格的に検討する機会をこうして持つことができたということが大変意義深いことだと思っております。高校生の学力問題がようやく大きな話題になり、厳しい状況を迎えていると言わざるをえません。大学からみて高校生に期待される学力は何であるか、それを実践するにはどんな方法が適切であるのか、といったことについて議論を深めていただければと思っております。

ちょうど一年前になりますでしょうか、附属学校のあり方が問題になり、その後、学内でもさま

ざまな論議が交わされてきました。大学法人化後の附属学校の位置づけに関して、附属学校が全学にとって必要であるという認識が出来つつあることを私も大変喜んでいるところでございます。今日の討議が名古屋大学と附属学校の連携に至る一つの道筋になるようなシンポジウムになればと期待いたしまして、私からのあいさつにかえさせていただきます。

司会（村上隆・研究科長）　それでは、これだけの提案者、討論者にお集まりいただいておりますので、すぐに始めさせていただきたいと思いますけども、若干、今日のシンポジウムの意義について私の方から説明させていただきます。名古屋大学は大学院重点化にともない、研究を重視する研究中心の大学であります。他方では学部の教育、教育を受けるといった、少なくとも人材面の確保という意味からすれば、非常に大事だなと思いますし、フォーマルな研究重点大学であると同時に、教養を重視する大学という、そういう方向で進んでいると思います。

その中で、いま伊藤副総長からもありましたように、高校生の学力に関心を寄せるということがあちこちの大学でおこり、また国民的関心を呼んでいるといってもいいかもしれません。今日の夕方4時からNHKの番組でも取り上げるほどです。しかし、今まで高等教育はあまり中等教育に関心を持ってこなかった。他方、中等教育の場にとっても、必ずしも高等教育のためにあるものじゃない、中等教育自体で自己完結したものであるという発想が非常に強くて、高等教育に対する関心が弱かった、あるいは中等教育と高等教育の連携に対して消極的であったという風に言えると思います。

しかしながら、高等教育進学率が5割に達しようとする状況の中で大学が変わってきた、中等教育の側でも変わってきているように思います。今や「中高大接続」、あるいは「中高大連携」という概念に基づいて双方の改革を行っていくべきと思います。それを議論する場というのは単発的なものはいくつかございますけど、かならずしも十分なものとはいえない。この点において、本学が附属学校を持っているということは、非常に大きな意味を持っているということだろうと思います。今日のシンポジウムを附属学校で開かせていただいているという意味もそこにあるでしょう。

本日は、中等教育にとって高等教育はどういうものなのかということと同時に、高等教育の側から見て中等教育とは何か、さらに「大学の知と高校生の学力」のタイトルにしぼってみれば、大学が期待している高校教育に限定して、ご討議願うことになると思います。まず、4人の先生方から、15分ずつ提案をいただきます。その後、休憩を若干とらせていただいて、その後にお二人の指定討論者の御意見をいただき、さらにもう一度各先生方から一言ずついただいた後で、フロアからの御意見をいただいて、ディスカッションをしていこうと思います。

必ずしも十分な時間がありませんが、できる限りの議論を行っていきたいと思っております。それでは、さっそく多元数理科学研究科の浪川幸彦先生からお話をうかがいたいと思います。よろしくお願いします。